My HERO

沙里音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｙ　ＨＥＲＯ

【Ｎコード】
Ｎ０２７０Ｄ

【作者名】
沙里音

【あらすじ】
ＨＥＲＯの香澄視点で書いた小説です。ＨＥＲＯを読まなくても読めます。

第一話

マイヒーロー。

あなたは最後まで　カッコ良かったです。

“じゃあ俺は　ヒーローになる”

そんなバカ寒い台詞を、ためらいもなく堂々と言葉にする男。

三村和俊に出会ったのは、何てことはない、ただの合コン。

都内の女子高の二年生だったあたしが、たまたま一回参加してみたイベント。

もともと寂しがり屋じゃないあたしは、別にどうしても彼氏が欲しかったわけでもないけど。
そう言うことに興味があるのは、女の子なら当然だと思う。

とにかくそこで、運命なんてなーんにも感じない出会いをした。

「俺三村和俊、よろしくー。」

明るい印象で、だけど別に特に目立っていたわけじゃない。

一目惚れとか、そう言うのとは全然違った。

「ねぇ、アドレス教えてくんない？」

でも連絡をとっていくうちに、どんどん惹かれてった。
少しずつ会うようにもなった。

ただ映画行ったりボーリングしたり、カラオケ行ったりして。
付き合ってなくてもみんなしてること。

好きじゃなくても、みんなしてること。

なのにあたしは　どんどん好きになっていった。

「なぁ、いい加減和俊って呼んでよ。」

「なんで。」

「だっていつまでたっても“三村君”じゃおもんないじゃん。」

「面白い面白くないの問題なの？」

どこにでもある、普通の片思いだった。

だけどあたしはもともと社交的じゃなくて、コイビトへの進み方が分らなかった。

「えー、だってー、俺は　香澄って呼んでるのに。」

「それがおかしいんじゃない？付き合ってもないのに。」

確か、カラオケに行ったときだ。
きっと友達のノリで、ただ暇つぶしに。
彼にとって　そんなだと思ってた。

「あはは！香澄ってカタイよな！いまどきそんな奴いねーよ！！」

「えー、そう？」

かたい！？
なにそれ、こっちは名前呼ばれるだけでいっぱいいっぱいなのに！

「なー、じゃあさ。」

ひとしきり笑った彼が、急に真面目になってこっちを見る。
あ、歌、始まってるよ。
そんなことも口に出来ないほど、緊張してたのを覚えてる。

「じゃあ付き合う？」

高校二年生の秋、別に初めての言葉じゃない。
付き合ったこともあるし、好きになった人だって結構いる。
なのに　あんなにドキドキしてた。

「好きんなっちゃったんだけど。」

何も言えなかった。
自分が、ちゃんと瞬きしてるのかも分らなかった。

「てゆーか、ずっと好きだったんだけど。」

ずるいよ。
何その上目遣い！
わー、だめだ。

「う、ん。」

降参だ。白旗だ。

ずるいよ　何でこんなにも　苦しくさせんの。

「うん、あたしも、好きだった。」

どこにでもあるような恋愛だった。

なのにこの恋は　世界中どこを探してもないと思えた。

今生きている誰よりも幸せだった。

高校二年の秋。

こうして和俊とあたしは、彼氏と彼女になった。

第二話

それから半年。

倦怠期も修羅場もあったし、喧嘩もいっぱいしたけど、離れ離れにはならなかった。

「香澄！カラオケ行こー！」

電話やメールをくれるのは、付き合う前も付き合ってからもいつも和俊の方だった。

あたしは戸惑ってばかりで、自分はこんなにも恋愛下手だったかと思う。

もっと上手く　やって来たつもりだったなのにな。

「へ！？昨日鈴木君と神田君と行ったって言ってたじゃん。」

「俺三日続きでも行けるー！」

「えぇえ…。」

「それに昨日は喋ってばっかりで全然歌ってねーんだ。」

あたしと行ってもそんなに歌わないじゃん。
いっつも学校の話とか鈴木君と神田君の話とか…まぁたまに恋人らしーことしたりとか。

「ほんとに仲いいねー、いっつも三人だし。」

「ずっと親友やってっからなぁー、思えばこんなに続くのもすげぇな。」

「好きなんだね。」

鈴木君とも神田君とも面識はあった。
鈴木君は結構気が合ってよく喋ってたし。
神田君は人付き合いが苦手なのか、それともあたしを良く思ってないのか、ちょっと怖い印象だった。

「好きって！もぉ何ゆうのあんたー！！」

「ええ！？別にそうゆー意味じゃないよ！？」

「ぎゃはは！分かったんよ！」

「もー。」

「うん、まー…好きだから一緒にいるんだろーな、一緒にいたら楽だし。」

あたしが和俊に聞かされるのは、いつもクラスの話題か親のことか。あとは、“耕介”にバカにされたーとか、“裕弥”はどんくさいんだーとか。

そんなのばっかで。

「あ！でも耕介は油断ならねぇけどな！！」

「う…。」

和俊は単純なくせに、妙なところで根に持つタイプだ。

あたしは鈴木君と二人きりで会ったことがあった。
別に、偶然だったし何か下心があったわけでもないんだけど。
それを知った和俊は結構怒った。

「ははッ、別にもーいいんだけど。今考えたら俺って心せま！って思うし。」

「ああ確かにねー。」

「こらァどの口が言うかー！」

「やー！」

和俊と話す　一つ一つの言葉が楽しかった。
下らない喧嘩もいっぱいしたし、別れ話が出そうになったこともあるけど。
それでもやって来れたのは、この楽しい瞬間があるから。

「香澄昼何食べたい？やっぱハンバーガーとポテトだよな、うん。」

「えー、最近ずっとマックじゃん！」

「こら、我儘言うんじゃありません！」

「なにそれ。」

「お母さまー。」

「じゃあもっと栄養考えてよっ。」

「あははっ！」

ケラケラ笑う、和俊。

カラオケや映画、ボーリング。

付き合う前もやってたことばかり繰り返し、何も変わらなかった。

半年前も今も　変わったのは　恋人っていう肩書き。

第三話

「なぁ、何の映画見たい？」

時々どっちかの部屋で、他愛ない話をした。

思い出したようにじゃれ合っては、求め合ったこともある。

「んー、今何やってんの？」

「なんかイルカのやつとか戦争のやつとかー、あと美少女戦士のアニメ映画とかー。」

「ぜんぜん分んない。」

あの時は和俊の部屋で、あたしは雑誌読みながら、和俊はインターネットで映画検索しながら。

「ヒーローのもあるけど。」
「どんなの？」
「なんか男が世界救ってくやつじゃねぇ？ヒーローものだし。」
「適当だねー。」
「なに、興味ある？」
別にー。
ただ美少女戦士よりは良いかなって思っただけ。

「ヒーローとか好きなの？」
「んー、嫌いじゃないよ。」
「意外！ヒーローとか王子様とか大ッ好きなんだ！」
「そこまで言ってないよ！」

実際、ヒーローとか王子様なんて信じらんないし。
和俊はなぜかツボにはまったらしく、笑うだけ笑って本当に意外そ

うにあたしを見た。
なんだよ、バカにしてんのか。
あたしはふくれっ面になりながら、和俊をジトッと睨んだ。
なのに和俊は楽しそうな顔でこっちを向いて。
自信あり気に笑顔を浮かべながら。

「じゃあ俺は、ヒーローになる。」

寒い！
って、今なら思うんだけど。

その時は感動してた。
ずるいって思った。
サッカーだったらレッドカードだ。

ずるい　かっこよすぎて　反則だ。

この恋は　手放せなかった。

表現豊かじゃないあたしは、告られたあの日しか好きだって言えなかったけど。

どこにでもあるこの恋は　だけど彼は　たった一人のヒーローだった。

第四話

「なぁ？」

この日も和俊の部屋。
つまらないこで喧嘩して、うん、いつものこと。

「いい加減機嫌直せってー。」

いつも最初に機嫌が直るのは和俊。
ほんとに短絡的。

日常茶飯事だった下らない喧嘩のことは、多分もう全部忘れてると思う。

だけど、だからあたしたちはやって来れた。

「別に怒ってないよ。」

「えー、だって声が怒ってる！顔も！」

「もともとこんな声と顔ですー。」

「あ、そっかぁ。」

「なっ…、もう。」

こんな感じで、適当に喧嘩して適当に仲直りする。
うーん、仲直りって呼ぶにはどうかと思うけど。
なんか、いつの間にかいつも通りって感じ…かな。

「和俊ー、香澄ちゃん、ちょっとー。」

下からおばさんの呼ぶ声がした。

付き合って　もう　一年になる。
結構遊びに来てたから、和俊の家族とも仲良くなってた。

「はぁい。」

階段を下りると、おばさんは夕食の準備をしていた。

「香澄ちゃん、今日ご飯食べてく？」

「あ、はい！あの、良いですか？」

「もちろんよー、悪いんだけど、ちょっと手伝ってくれる？」

「はいっ。」

和俊もすぐ下りてきた。

夕食の支度を手伝うあたしの後姿を見ながら、和俊は笑った。

「おー、何かいいなー、お嫁さんみてー！」

「えー？」

「もう何言ってんのこの子はぁ！」

楽しそうに笑う和俊に、あたしも振り向かないまま笑う。

おばさんも振り向かないまま、ちょっと笑って。

「あ、でも　香澄ちゃんだったらいつでも歓迎するからね。」

うあ、すっごい嬉しい…！

もう本当にこのまま此処にいたいと思った。

和俊の家族は素晴らしい。

あたしなんかにもすっごい優しいし。

「うん、ずーっと一緒にいような　香澄。」

和俊。
確信犯？
ねぇ　泣きたくなったこと　知らないでしょ。

「ちょっとこんなとこでそんな事ゆわないでよッ。」
「いいじゃん別にー、なぁ？」
「はいはい、もうお腹いっぱいねー。」

照れ隠しで怒ったようにゆったら、和俊はまた楽しそうにする。
おばさんも笑って会話に入りながら料理する。

ああ、こんな家族が欲しいと思った。

こんな母親になりたい。
和俊と　ずっと　ずっと　一緒にいたい。

しあわせだった。
しあわせだった。
しあわせだった。

本当に本当に　もうこれ以上の幸せは　ないと思ってた。

和俊　あの日　までは。

第五話

付き合って一年。

マンネリ化する時期なのに、あたしと和俊はほとんど変わらなかった。
いつも通り…もともと全然“ラブラブ”なんかじゃなかったけど。
なかったからかな。

とにかく会う回数も、遊ぶ内容も、キスもそれ以上も、最初の頃とあんまり変わりはなかった。

そう、その日も、いつもと同じようにデートして。

「じゃあな、来週の日曜日、バイクで迎えに来るから。」

「どこいくの？」

「まぁまぁ、行ってからのお楽しみー。」

「なにそれー。」

いつものようにあたしを送ってくれて。
いつものように次の約束をする。

「またな。」

これもおんなじセリフ。

和俊がバイクにまたがって、あたしの家から離れてく。
それをあたしは別に手を振るわけでもなく見送った。

ただ小さく笑って。

『またな』

次がある　そんなの　当たり前だったから。

『どこいくの？』

『まぁまぁ、行ってからのお楽しみー。』

どこ、連れてってくれるんだろ。

次の日曜日。
四日後かぁ。

楽しみ　だな。

次の約束に思い馳せて、家に入ってただいまって言った。

何の予感もなかったんだ。

あまりにいつも通りすぎて。

せめて彼女として、マンガとかドラマみたいに、嫌な予感くらい感じられてれば良かったのに。

和俊が　事故にあったのはその帰り道。
バイク事故。

何　やってんの。

どうしよ…。

「三村和俊の病室はどこですか！？」

大丈夫だよって、鈴木君が言ってたんだ。

和俊の親友。
連絡をくれた時に鈴木君が言ってたから、大丈夫だと思ってた。

「今手術中です。」

和俊。

和俊。

手術だって、何やってんの。

大丈夫だよね？

きっと腕かなんか怪我しただけで、縫ってるんだよ今。

案外無償かも。

検査の手術とか。

バカな考えを、自分に言い聞かせることで立っていた。

和俊の手術室の前で。

鈴木君と神田君がいてくれなかったら倒れてたかもしれないけど。

二人はあたしをなだめるように傍にいてくれた。

ずっとずっと一緒にいた分、もしかしたらあたしよりも心配かもしれないのに。

ううん、でも和俊。

あたしは和俊が世界一好きだから、本当に本当に苦しかったよ。

大好きで　だから　いなくなったりしないで。

第六話

「手術は成功しました。」

鈴木君と神田君、和俊の家族とあたしはその場で安堵のため息をついた。

助かったんだよね　和俊。

「申し訳ありませんが、暫くご家族以外面会出来ません。」

和俊の家族は、それを聞いてすぐに服を受け取っていた。

やだ　あたしも会いたい。

「おばさん…おじさん…ッ。」

「大丈夫よ　香澄ちゃん。ごめんね、行って来るね。」

大丈夫？
だいじょうぶなの？ほんとに？

ほんとに？　和俊。

「香澄、俺達は入れないんだよ、落ち着いて待ってよう。」

鈴木君とは、断然和俊よりも気が合った。

和俊の紹介で知り合ってからたくさん話をしたし、和俊抜きで会った。

あの時はけっこー怒られたよね、和俊に。

でもあたしは　和俊しか見てなかった。

気が合う合わない以前に、考え方が全然違っても、そんな和俊が好きだった。

だから和俊。

和俊　どうか。

「ここ座れよ、大丈夫か？」

「ありがとう　でも良い。」

神田君の言葉を早口で断った。
口を開いたら開いた分だけ、泣き声になってしまいそうだった。
それにきっと、座ったらすぐに立ちたくなってた。

しばらくすると、おばさんだけが出て来た。

「おばさん！」

「香澄ちゃん、耕介君、裕弥君、本当にありがとう。」

おばさんの目は赤く腫れていた。
それを見たら、どうしようもなく泣きそうになった。

「和俊　今ね、危ない状態なの。私たちは今日此処に泊めてもらうことにしたから…。あなたたちは今日はもう遅いから、帰った方がいいわ。」

ね？と、おばさんは、あたし達を説得するように言った。

でもあたしは引き下がれなかった。

「あたしも泊まります！」

「だめよ、帰りなさい。」

「お願いします、会えなくてもいいから、此処にいさせて…！」

会いたい　会いたい　会いたいよ　和俊。

でも叶わないなら　せめて少しでも。

「あなたは帰ってちゃんと寝なさい。和俊もあなたには無茶をしてほしくないはずだから。」

「無茶なんて…ッ！」

いつも明るいおばさんの。
こんな真剣で、強い顔を見たのは初めてだった。

「…。」

確かに、ここにいても眠れない。
ずっと和俊の方向いて、泣いているだけかもしれない。
迷惑だ。

「…香澄ちゃん。」

「……分りました。何かあったら、絶対絶対連絡下さい！明日、また来ます。」

鈴木君があたしを説得させるような目で見た。
その目からすぐに視線を外して、あたしはおばさんにそれだけ言って、逃げるように和俊に背を向けた。

明日絶対来るからね！

「あ、香澄！…じゃあ、俺達も失礼します。」

鈴木君と神田君があたしを追いかけて来るのが分かった。

なんで？

なんで？鈴木君も神田君も、そんなに冷静なの。

こわいよ。

「香澄！」

「離してよ！」

鈴木君があたしの手を取った。

それを振り払うようにして、あたしは声をあげた。

「おい、病院だぞ。」

神田君の言葉に、何故か頭に血が登ってしまった。

「何でそんな普通にしてんの！？和俊は今苦しんでるんだよ！？何で平気なの！…ねぇ…ッ。」

病院ということを注意した神田君は、さらに声を上げたあたしにギョッとしていた。
鈴木君は冷ややかな目を向けて、あたしの頭にポンと手を置いた。
小さな子供にするようなそんな仕草に、だけど込められた意味は全然違った。

「頭冷やせよ、香澄がそんな風に暴れて泣いて、そしたらカズは助かんの？そんなんで助かんだったら、俺らだってそうしてるよ。」

鈴木君の、あたしの頭に乗る手が震えていた。

制裁の意味を込められた、でもきっと、それは鈴木君の逃げ道でも

あったんだろう。
神田君の握り締めてる拳は、力が入りすぎて白くなってた。

同じだ。
いても立ってもいられないあたしたち。

「ごめ…、八つ当たり…ッ。」

「ううん、いいから。」

「う、あ…ッ。」

あたしは鈴木君と神田君の服の袖を掴みながら、小さく泣いた。
泣くことしか出来ない無力な自分が本当に嫌だった。
だけどやっぱり、泣くことしか出来なかった。

「こわいよ……ッこ、こわ…！」

「うん、うん。」

鈴木君と神田君は、ずっとそのままでいてくれた。

その晩はみんなで、一番近かった神田君の家に泊まって。

家と病院と三村君の家を行き来する。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0270d/

My HERO

2010年10月8日22時42分発行